



Data

監督: 瀬々敬久
 原作: 薬丸岳『友罪』集英社文庫刊
 出演: 生田斗真/瑛太/夏帆/山本美月/富田靖子/奥野瑛太/飯田芳/小市慢太郎/矢島健一/青木崇高/忍成修吾/西田尚美/村上淳/片岡礼子/石田法嗣/北浦愛/坂井真纪/古馆寛治/宇野祥平/大西信満/渡辺真起子/光石研/佐藤浩市

👁️👁️ みどころ

中森明菜のヒット曲「少女A」ならぬ、「少年A」による1997年の「酒鬼薔薇聖斗事件」には日本国中が震撼！「少年法」によって氏名が伏せられる等の恩恵(?)を受けた少年Aは、17年後の今、どこで何を？

他方、「犯罪被害者等基本法」の成立、刑事裁判への被害者参加制度の実現等の実績をあげた岡村勲弁護士による「全国犯罪被害者の会」は、2018年6月に解散したが、酒鬼薔薇聖斗事件の被害者の遺族たちは今どんな思いを・・・？凶悪犯罪の加害者の罪を一体どう考えればいいのか・・・？

そんな重いテーマに、瀬々敬久監督が挑戦！加害者は少年Aの他、中学時代の“いじめ”によって自殺した親友への罪の意識を消せないジャーナリスト志望の若者と、息子の交通事故の罪を“家族の解散”という形で今なお一身に背負う中年男が登場。それに絡む興味深い女性たちのキャラを含め、瀬々監督特有の青春(?)群像劇になっているが、彼の問題提起には、もちろん正解はない。

本作ラストに登場する2人の若者の心象風景の美しさを確認しながら、“友罪”というタイトルの意味をしっかりと考えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■薬丸の原作は重い！瀬々の映画も重い！なのに友罪？■□■

かつて、中森明菜の初期の何ともかっこいいヒット曲に「少女A」があったが、「少年A」(の事件)は悲惨。これは、1997(平成9)年に起きた神戸連続児童殺傷事件のこと。少年法の関係で加害者男性の実名が伏せられたが、被害者の山下彩香ちゃん、土師淳君の

遺体の一部が「酒鬼薔薇聖斗（さかきばらせいと）」と名乗る「挑戦状」と共に発見されたため、酒鬼薔薇聖斗の名前も有名になった。また、加害少年は2015（平成27）年6月に「元少年A」の名で手記「絶歌」を出版したため、世論はその賛否に沸いた。さらに、今年2018年5月24日には、土師淳君の死亡から21年を迎えたため、新聞各紙は土師淳君の父親・守さん（62歳）のインタビュー記事を掲載した。

そんなタイミングで、瀬々敬久監督が菓丸岳の原作「友罪」を映画化。私は原作を読んでいないし、菓丸岳という作家も知らなかったが、少年Aをテーマにした重い小説なのに、なぜ「友罪」という、わかったようなわからないようなタイトルをつけたの？それが気になってパンフレットを読むと、原作者にはこのタイトルに「秘めた思い」があるようだ。また、パンフレットにあるインタビューで瀬々敬久監督は、「菓丸さんが描く世界観には、いつも純粹さを感じますし、造語のタイトルも含め、それが救いになっている気がします。」と話しているから、彼もかなりこのタイトルにはこだわったのだろう。

しかし、そもそも友と罪とは相反する概念のはずだが、あえて菓丸岳がそれをひとつの単語（造語）とし、そのタイトルにこだわったのは一体なぜ？少年Aの事件をテーマにした菓丸岳の原作は当然重ishi、瀬々敬久監督の本作も重いが、まずはそのタイトル「友罪」への「秘めた思い」とは・・・？

■□■瑛太に注目！知的な大久保一蔵 VS 不気味な元少年A■□■

犯行当時14歳だった元少年A（＝青柳健太郎）は17年後の今、鈴木秀人（瑛太）と名前を変えて川島社長（小市慢太郎）が経営する町工場で見習いとして働き始めていた。たまたま、そこで同僚になったのが元週刊誌ジャーナリストの益田純一（生田斗真）。そして、寮の先輩が清水（奥野瑛太）と内海（飯田芳）だ。そんな導入部から始まる本作では、ジャーナリストへの夢が破れて、今は町工場でひっそり働いている益田と、その元恋人で、今は須藤編集長（古舘寛治）の下で雑誌記者として働いている杉本清美（山本美月）との議論の中で、益田の人物像はかなりはっきり浮かび上がってくる。しかし、そもそもパソコンの方が似合う益田が、町工場での慣れない肉体労働で指を切断する事故を起こしたのは悲劇だが、鈴木の一瞬の機転によって、その指が繋がったのは実に喜ばしい。それによって、益田の鈴木に対する友情は当然深まったが、さてこの鈴木という男は一体何者なの？それが全くわからないまま、2人は友達になれるの・・・？

他方、本作で元少年A（＝青柳健太郎）の17年後の鈴木という難役に挑んだのは瑛太。彼は現在、NHKの大河ドラマ『西郷どん』の大久保一蔵役を演じているが、西郷吉之助が奄美大島から薩摩に呼び戻されたこれからは、大久保との二人三脚による大活躍が始まるはずだ。その『西郷どん』にみる大久保は極めて知的だが、本作にみる鈴木は、不気味さが際立っている。それを本作でここまで観客に感じさせる瑛太の演技はすごい！また、結果的に鈴木の人恋になった元AV女優の藤沢美代子（夏帆）は元彼氏・唐木達也（忍成

修吾) のDVに悩まされていたが、その「絡み」の中で鈴木が自らの頭を何度も石で打ち続けるシーンの迫力は相当なものだ。

もっとも、これは瑛太の工夫で、瀬々監督もそれを容認したのだろうが、鈴木のスローで少し舌足らずなしゃべり方は如何なもの・・・？元少年Aの17年後である鈴木の知的レベルがどの程度なのかはもちろんわからないが、いくら何でもあんなしゃべり方はしていないのでは・・・？それもこれも含めて本作では、元少年Aの17年後である鈴木秀人役に挑んだ瑛太の演技に注目！

■□■益田の罪は？彼のSNSの活用は？■□■

少年A(＝青柳健太郎)の罪は数件の殺人事件だから、その犯罪性は明白。しかし、少年Aと同じように中学生の時に“いじめ”によって自殺してしまった親友を救えなかったうえ、自分もその加害者になったのではないかと悩み続けている益田の罪(の成否)は微妙だ。少なくとも、これが法律上罰せられる罪ではないこと、また、益田自身が心の中に抱え込んでいる罪にすぎないことは明白だ。町工場の寮でたまたま鈴木と同室になった益田が鈴木と親友(?)になったきっかけは、「自殺した中学時代の同級生に似ている」と話しかけた時、鈴木から「俺が自殺したら悲しいと思える？」と唐突に尋ねられ、とまどいながらも、何とか「悲しいに決まっているだろう」と答えたことだが、なぜこの時鈴木はそんな質問をしたの？ジャーナリスト魂を今なお失っていない増田が、そう考えたのは当然だ。

しかし、指を失うかもしれない状態で入院していた益田を数年ぶりに見舞いに来た元恋人・清美との会話は、増田にとって好ましいものではなかった。それは、埼玉で起きた児童殺害事件の記事で行き詰まっていると打ち明けた清美が、17年前の連続児童殺傷事件の犯人・青柳健太郎の再犯だという噂について意見を求めてきたからだ。つまり益田は、彼女のそんな雑誌記者としての取材ぶりに嫌気がさしたのはもちろん、ジャーナリスト時代に自分の書いた記事で上司と対立し、上司を殴って会社を辞めてしまった過去を生々しく思い出してしまったわけだ。益田の中学時代の親友がいかなるいじめに遭っていたのか、益田は彼とどのような距離感を取っていたのか、そして、その親友の自殺に益田の罪はあるのか？等々についてはその後スクリーン上で再三提示されるが、それを見ていると本当に益田は犯罪加害者なの？という疑問が湧いてくる。しかし、あなたは増田の罪をどう考える・・・？

■□■この中年男は息子の罪で家族を解散！その罪は？■□■

本作では、少し痩せて病弱気味に見える(?)名優・佐藤浩市が、交通事故によって3人の子供の命を奪った息子の正人(石田法嗣)の罪を償うため“家族を解散”し、今はタクシー運転手として一人で生きている中年男・山内修司役を演じている。「酒鬼薔薇聖斗事

件」は日本中に衝撃を与えた14歳の少年による凶悪犯罪だが、友人のいじめを放置もしくは何らかの加担をしたことになる益田に大きな罪があるわけではない。また、交通事故で被害者を死亡させた正人も、たしかに業務上過失致死傷罪としての処罰は免れないが、交通事故による過失犯は、はっきり言って誰にでもあり得るもの。したがって、その罪のために、直接の加害者である正人のみならず、父親の修司までが妻の智子（西田尚美）と離婚し、さらには“家族を解散”するまで“加害者”としての罪を背負う必要があるのか？ 私にはそこがよくわからないから、瀬々監督が原作にあった山内修司の物語を本作でここまで“膨らませた”狙いがイマイチ理解できない。

また、正人には今、千尋（北浦愛）という恋人ができて、そのお腹には新しい命が宿っていたため、結婚まで決意したのだが、それに対する修司の、「お前が幸せになっていいのか？」「お前の結婚は許せない。」との発言は如何なもの？ 私は、「それじゃ、（加害者の）私たちは幸せになってはいけないのですか？」反論する千尋の意見の方に同調したいが、さて、瀬々監督はその点どう考えているのだろうか。また、智子の父親の葬儀に駆けつけた修司がいつまでも正人の罪に固執し加害者としての罪を背負い続けていることに智子の弟・飯島武士（村上淳）はキレてしまうが、このシーンを見ている、私は飯島の方に賛成だ。

瀬々監督の『64—ロクヨン—前篇』（16年）（『シネマ38』10頁）『64—ロクヨン—後篇』（16年）（『シネマ38』17頁）では、はまり役を演じた佐藤浩市だが、本作の山内修司役はどう考えても佐藤浩市にとって損な役で、理解しにくい役。私はそう思うのだが、さて・・・。

■犯罪被害者の視点、立場も！被害者の会の解散に注目！■

本作は少年A（＝青柳健太郎）とその17年後の鈴木秀人という“犯罪加害者”を中心とし、ジャーナリストへの夢を諦めた鈴木と同世代の益田の罪、更には中年男・山内の罪にテーマをあてた映画。しかし、犯罪には加害者と同時に被害者がいるのだから、加害者の視点だけではなく、被害者の視点・立場も重要だ。

そんな視点で考えると、土師淳君の父親が21年ぶりに新聞のインタビューに応じたのと同じ時期に、「全国犯罪被害者の会」が18年間の活動の歴史に幕を下ろしたことが注目される。これは、仕事上で逆恨みされた岡村勲弁護士（妻が1997年10月に殺害された「山一証券代理人弁護士夫人殺人事件」）を契機として結成された組織。犯罪被害者や遺族の権利確立を訴えてきた同会は、今日までに犯罪被害者等基本法を成立させ、また刑事裁判への被害者参加制度を実現させる等の大きな役割を果たしてきた。しかし、最多で375人、近年は約270人の会員が所属していたが、上記のような一定の役割を果たしたことや会員の高齢化などを理由に今年3月、解散を決定した。

近時①2016年の植松聖容疑者（26歳）による「相模原障害者施設殺傷事件」②

2017年の竹島叶実容疑者（26歳）による「神戸市北区5人殺傷事件」③2017年の白石隆浩容疑者（27歳）による「座間市9遺体事件」等の「酒鬼薔薇聖斗事件」とよく似た凶悪犯罪が次々と発生しているが、それを考えるについては、加害者側と被害者側双方の視点・立場が大切だ。ちなみに、これも佐藤浩市が主演した『誰も守ってくれない』（08年）は、“犯罪者家族の保護”という珍しい視点からの問題提起作だった（『シネマ 22』258頁）から、同作も本作と対比して鑑賞すればもっという勉強になるはずだ。

■□美代子と白石先生の人物像は少し難解！■□

本作導入部で、山内のタクシーに乗って犯罪現場に登場する雑誌記者・清美は、日本のそこらじゅうに転がっているキャリアウーマン志向の強い女の子だから、その人物像はわかりやすい。もともと、クライマックスに至る過程の中で益田のスマホに入っていた鈴木がカラオケを歌っている画像を、勝手に（？）自分のスマホに取り込み、かつ勝手に雑誌に載せたのは、いくら編集長の裁決を経たもので、記事の文章が自分のものだったとしても、如何なもの・・・？この手の、特ダネ欲しさのルール逸脱気味のおネエちゃんジャーナリストには困ったものだ。

それはともかく、本作でもっともキャラがわかりにくい女の子が夏帆演じる美代子だ。元恋人である達也は結構イケメンだから女には不自由していないと思うのだが、今なお美代子をDV気味に追っかけまわしているのは一体なぜ？そんな疑問をほらみつ、ストーリー展開の中では美代子が元AV女優だったことが生々しい形で明らかになっていく。この手の女の子の“転落物語”は私には馴染みがないものだが、そりゃひどいものだ。そんな美代子が鈴木に惹かれていったのは一体なぜ？また、この2人が、同僚の益田や先輩の清水、内海たちと一緒にカラオケに興じるまでになったのは一体なぜ？そんな美代子の人物像はかなり複雑だ。

他方、本作には医療少年院で鈴木（青柳）を担当していた白石弥生先生（富田靖子）が登場するが、その最初のシーンは鈴木が描いたスケッチ帳の中の絵としてだ。そこには白石先生のヌードの絵が描かれていたので、これを盗み見た清水、内海、そして益田はもちろん、観客もビックリ！もともと、『タイタニック』（97年）では、ジャックはローズのヌード姿を実際に見ながらデッサン帳に描いていたが、白石先生のヌード姿は本物のスケッチではなく、きっと鈴木の想像（妄想）の産物なのだろう。少年院勤務をしていれば、さまざまな問題少年に接するのは当然だし、そのことで物理的にも神経的にも時間を取られるのも仕方ない。しかし、そのために自分の娘へのケアがおろそかになっては本末転倒だ。ところが白石先生の場合は、高校生の娘から思いもかけない“妊娠”を打ち明けられるという形で、鈴木の前犯の噂ばかりに心を砕いていたため“身内の反乱”に気づかない大失敗をしてかしてしまうことになる。このように、白石先生のようなおばさんの人物像については、単に職務熱心なだけと言ってしまえばそれっきりだが、結構複雑で難解なので、

しっかり考えたい。

■□■今の鈴木は17年前の青柳？そうだったら、ナニ？■□■

一緒に仕事をし、寮で一緒に生活をしている鈴木は、ひょっとしてあの凶悪事件の犯人である少年A（青柳健太郎）の17年後の姿・・・？益田がそう考え始めたのは、清美から再度「17年前の事件について意見を聞かせて」というラインを見て、ため息をつきながらパソコンを開き、事件について検索した結果、画面上に当時14歳だった青柳の顔写真を見た時からだ。さらに検索すると、青柳と一緒に写っている教室の写真は、あのスケッチ帳で観たヌード姿の女性と同じだったから、益田はさらにビックリ。もっとも、それがわかったからナニ・・・？一体何がどうなるの・・・？もちろん、益田はこの驚愕の事実をそのまま清美に教えるほどの馬鹿ではないが、この時以降、益田の白石に対する見方が微妙に変化したことは確かだ。

しかして、瀬々監督が本作のラストで描く鈴木と益田の心象を巡る風景は美しい。鈴木が殺人を犯した場所と益田の親友が自殺した場所が物理的に重なり合うはずはないが、2人の心の中に残っている“あの時の罪の風景”は似たようなものはず。そんな解釈の下で作られた本作ラストの美しい映像に注目したい。

他方、益田のスマホにのみ収められているはずの、カラオケ店で楽しそうに歌う鈴木の写真が、目を隠しているとはいえ、週刊誌に掲載されたのは実に遺憾！こんなお行儀の悪い週刊誌がゴマンといるから、日本はゴシップ騒動が絶えないわけだが、一体なぜこんなことに・・・？誰よりも強くそう考えたのは、当然益田だ。そのため、益田は直ちに清美と編集長の下に抗議に赴いたが、そこでいくらケンカしても後の祭りだし、暴力沙汰に及べばあの時のくり返し、いやそれ以上の新たな罪になってしまうだけだ。このような形で17年後の少年Aの姿が社会に露出してしまったことに益田はもちろん清水、内海も驚いたが、さて、当の本人は・・・？

瀬々監督特有の青春(?)群像劇として、加害者と被害者双方のさまざまな人物を描いた本作のラストは、前述のようにきわめて美しい風景になっているので、それを味わいながら瀬々監督の問題提起をしっかりと考えたい。なお、本作と同時期に公開される瀬々監督の『菊とギロチン』(18年)を同時に鑑賞すれば、瀬々監督の問題意識がさらによくわかるはずだ。

2018(平成30)年6月11日記